



No.205

ティークレイク

Tea Break

弁理士会役員会秘話その3 (回顧録)

会員 正林 真之

PCR検査の必要性が要求されるコロナウイルスというのは、一本鎖RNAのウイルスである。ここで、RNAというのは、DNAとは異なり、修復機能が無い。修復機能が無いので、複製の際のコピーミスが起これば、それは修復されずに、「突然変異」として次世代に受け継がれることになる。これが、コロナウイルスが変異しやすいことの原因であるが、要は、きちんとした修復機能が存在するものは変わり難く、修復機能が存在しないものはコロコロと変わる。そういうことなのである。

そしてこれは、何もウイルスに限られず、会社組織等でも同様であり、ガバナンスがしっかりとしていて、組織の修復機能がしっかりとしているところは、変わり難い。これは、良い意味では「安定している」ということになり、悪く言えば「変化できずに、硬直化している」ということになる。

もちろん、我々の所属している日本弁理士会という組織は、ここで今さらあえて言うまでもなく、良い意味では「安定している」、悪く言えば「変化できずに、硬直化している」組織である。したがって、前述のコロナウイルスは修復能力が無いことから、変異したら戻らないので、いくらでも変り種(カワリダネ)ができてしまうということになるが、片や弁理士会のほうは、コロナウイルスとは異なり、変種ができにくいという特性を持っている。

こうした特性は、世の中が安定していて大きな変化が無いようなときには強いのであるが、変化の激しい時代にはうまく対応できないきらいがある。そしてまた、世の中の変化に対応させ、来たるべき未来を見据えて行われた重要な提案が、それが重要なものであればあるほど、組織内で否定され、通らない傾向にあるのである。

ちなみに以前のティークレイクでは、「弁理士会役員会秘話」ということで、「体重に応じた弁理士会会費」という楽しい話も紹介したが、実際の役員会では、ものすごくシビアな議論がなされることも少なくない。それが来たるべき未来を見据えて行われる重要な提案なのであれば、なおさらである。

むろん、弁理士会のためにならないようなことをあえてしようとする者は皆無なのであるから、それこそ「弁理士会の将来のこと」を真剣に考えて、かなりの激論が交わされることになるのである。そうして完成された法案の中でも、今度は、通したい法案ほど、弁理士会の将来のために絶対に必要だと思っている法案ほど、反対が多いということになる。

そしてまた、役員会が最終的に決めた方針というのは、要は「やる」か「やらない」かのいずれかであるが、そのどちらを選択したとしても、「必ず非難される類のもの」なのである。必ず批判・非難されるものを選ぶというのは、決して気の進むことではない。そしてまた、そうした決定については、そのどちらを選んだとしても正解であると同時に、確実に不正解なのである。もしその一方を選んだとして、全く関係ない第三者から「あれは間違いだったのではないか?!」と気軽に意見される。むろん、その第三者には、それが苦渋の上の選択であることなど、分かりようもない。むろん、それをどう説明したところで、分かってもらえるものでもない。

したがって、重大な案件に接し、そうした中で苦渋の決断をしたような役員会というのは、決まって「孤独」である。どの会派からも理解されないばかりか、自ら所

属する母体にすら分かってもらえない。こうした孤独に耐えながら、ひたすらに自分の職責をこなしていく。

ただ、そうした状態を唯一理解してくれるのは、同じ役員会の仲間（会長＋8人の副会長）なのである。なので、これがとても大きな連帯感となる。こうしたことから、重大な決断をした役員会のメンバーほど仲が良い。そしてこれは、別の面から見れば、役員同士が仲良くなければ、纏まりが悪く、重要な法案を処理することができないので、仲が良くて纏まりがあったからこそ、その実績を成し遂げることができたということもある。けれども、いずれにしても弁理士会の将来を決めるような重要な案件を見事に処理した役員会のメンバーは本当に仲が良く、纏まりも良いものである。

なので、もし周囲に弁理士会の役員経験者が居るのであれば、聞いてみよう。「他の役員の先生方とは今も繋がりがありますか?!」と。

もしそこで否定的な言葉が返ってきたのであれば、残念ながらその年の役員会は何の実績も挙げていない。け

れども、それらの人たちのことをさも嬉しそうに語り始めたのなら、たとえその人がどんなに非難をされていようとも、その年の役員会というのは、大変に重要な成果を成し遂げているのだと、そう考えてまず間違いない。

追記

「覚えておきたまえ。－実績こそ君の存在だ。他のことなど、どうでもいい。マネージャーとは“実績をもたらす人間”だと私が定義するのはこの理由による。他人あるいは自分自身に対してどんな言い抜けを考案しようと、この事実を変えることはできない。そして君が立派な実績を挙げたのなら、他のことは全て忘れられた時になっても、世界はそれを覚えているだろう。そして何より重いのは、いつまでも君もそれを覚えているだろうということだ。

グッド・ラック　－　そして素晴らしい実績を成就されんことを！」

（ハロルド・ジェニーン「プロフェッショナル・マネージャー」より）